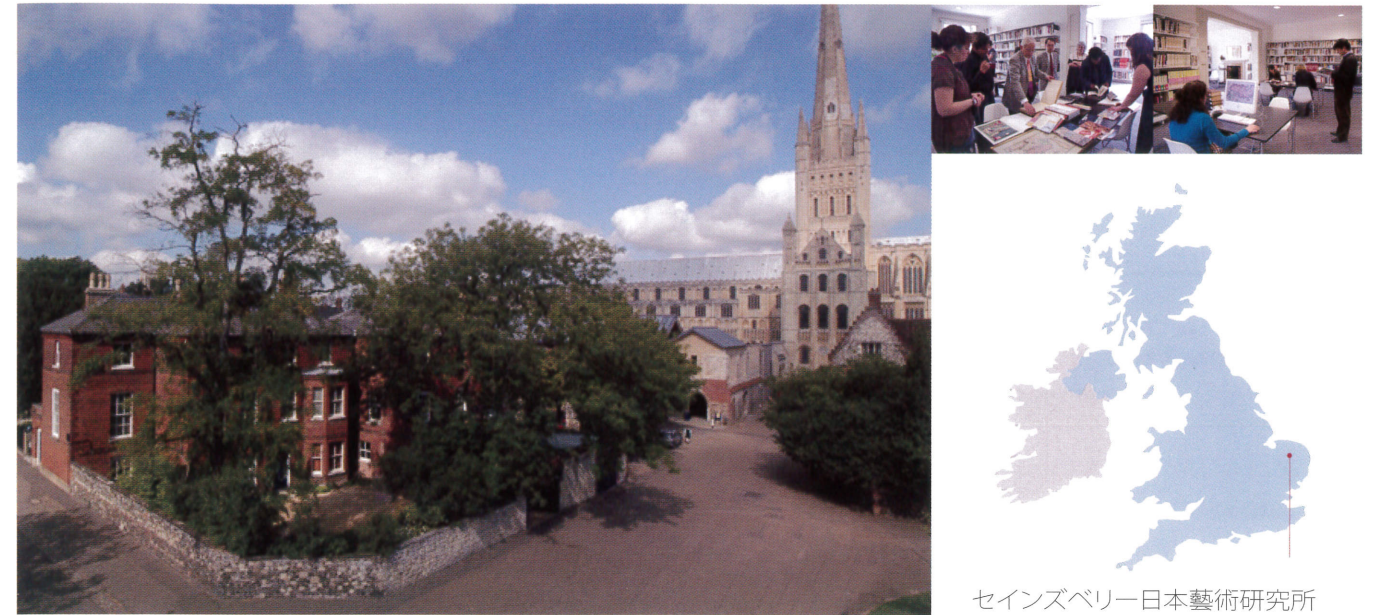


半田日本考古学フェローシップ(国際縄文学協会奨学生)は、縄文時代の研究成果を世界へ発表するとともに各国の人々との交流を深め、日本考古学の発展に貢献できる若手研究者を助成することを目的として、文化芸術活動を広く支援する当協会会長半田晴久氏の提起により2003年に発足したものです。

奨学生はセインズベリー日本藝術研究所本部を拠点とし、リサ・セインズベリー図書館に収蔵されるヨーロッパ随一の日本考古学関連の蔵書、発掘調査報告書、会報誌を自由に活用することができます。歴代の奨学生は、英国に滞在中、各自の研究活動に従事しつつ、研究所スタッフと協力しながら研究所主宰の展覧会、学会、出版プロジェクトに関わり、ヨーロッパにおける日本考古学の普及に努めてきました。



セインズベリー日本藝術研究所



水鳥 真美

Mizutori Mami

セインズベリー日本藝術研究所
統括役所長

日本文化を過去から現代まで一本の太い線でつなぎつつ、英国を拠点として活動することがセインズベリー日本藝術研究所の使命です。その中で、設立当初から考古学、就中、縄文時代は、研究所の研究、教育、そして啓発活動における重要なテーマとしての揺るぎない位置付けを与えられています。何千年にもわたる平和で安定した社会の継続を可能とした縄文時代の人々が残した遺跡、土器、土偶から現代の我々が学べるものは何か。世界の他の地域の先史時代と比べ、縄文時代の際立った特徴は何なのか。或いは共通点は何なのか。縄文時代と弥生時代の連続性、不連続性をどう見るのか。こういった問いに対する答えを探し求め、多くの展覧会、研究会を実施し、教材作成を行ってきました。そして研究所は幸いにして、縄文時代、そして考古学への熱い思いを共有するNPO法人国際縄文学協会からのご支援を得て、これまでに多くの半田日本考古学フェローを英国ノリッチにお迎えすることができました。これから、国際縄文学協会とタッグを組みつつ、日本を離れたところから日本について考えるという貴重な機会を一人でも多くの若く、優秀な研究者に提供し、将来の日本考古学研究、文化資源学研究を支える上で、微力ながら尽力してまいる所存です。



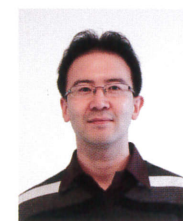
サイモン・ケイナー

Simon Kaner

セインズベリー日本藝術研究所
考古・文化資源学センター長
/ 国際縄文学協会理事

国際縄文学協会が2001年に設立されて以来、これまでに6人の半田日本考古学フェローがノリッチに派遣されています。私は6人の研究者全員と縄文時代の考古学に関する様々なプロジェクトに携わり、縄文という類稀なる時代に対する理解を世界的に広めるお手伝いをして参りました。フェローの方々から英国における精力的活動を展開された後、日本に戻られ、各方面で引き続き活躍されていることは誠に嬉しい限りです。アイルランドのポイン渓谷の先史時代の遺跡、クレスウェル・クレイグに残っている英国最古の芸術作品など、フェローの方々との研修旅行に出かけたことは、私の素晴らしい思い出となっています。また、欧州の博物館に所蔵されている日本文化資源学関連の作品とともに視察し、研究する貴重な機会にも恵まれました。そして、このような研究成果を多くの国際学会で発表するとともに、英国の主要な博物館における展覧会を実現することもできました。若手縄文学研究者にとり、キャリアの創成期において海外に滞在しつつ研究活動を行うことは、グローバル化が進んでいる今日において得難い経験です。一方、フェローを受け入れ、英国での研究、生活全般が滞りなく進むようお手伝いする側の研究所、そして私個人も、お一人お一人の方から学ぶところがたくさんあります。これからも国際縄文学協会から派遣される半田日本考古学フェローの方を受け入れ、縄文学研究を世界に普及させることに邁進する所存です。

第4・5回 Handa Japanese Archaeology Fellow



松田 陽

Matsuda Akira

東京大学 准教授

考古学と現代社会との関係についての研究を行う私にとって、半田日本考古学フェローとして縄文文化を英国またヨーロッパに伝えていく仕事に携われたことは、何物にもかえがたい貴重な経験でした。

フェローシップの期間中さまざまな活動を行いましたが、最も印象に残っているのは、2009年秋に大英博物館で開催された「The Power of Dogu (土偶の力)」展、そして2010年夏に University of East Anglia (イーストアングリア大学)内にある大学美術館Sainsbury Centre for Visual Arts (セインズベリー視覚芸術センター)にて開催された「unearthed (掘り出されたもの)」展の準備作業、そして両展覧会に関連する土偶についての研究会やイベントに携わったことです。縄文文化を媒介として日本と英国とをつなぐ上では、日本人として英国に滞在し、縄文文化に関する研究を着実に進めている機関に所属することが不可欠だと思いますが、その意味でセインズベリー日本藝術研究所はまさに理想的な所属機関でした。英国での縄文土偶の展覧会に関与することなどは、通常では決して経験することができないものであり、私は非常に恵まれた研究・実践環境に身を置くことができたと思っています。また、世界的なネットワークを誇るセインズベリー日本藝術研究所に身を置いたことによって、英国を訪れる欧州また北米の研究者たちと交流できたことも、私にとって貴重な経験でした。

第6回 Handa Japanese Archaeology Fellow



吉田 泰幸

Yoshida Yasuyuki

金沢大学 国際文化資源学センター
特任准教授

日本では「縄文」研究は歴史研究の一部であり、精緻な土器編年の整合性を突き詰める「考古道」の一部ですが、世界の「Jomon」研究は世界の先史文化理解に多様性をもたらす存在であり、狩猟採集民研究として人類学の一部であり、現代日本の文化ナショナリズムを考究する社会学的研究の一分野です。セインズベリー日本藝術研究所の半田日本考古学フェローシップは、イングランド南東部のノリッチという美しい街で、「縄文」と「Jomon」研究の間を行き来し、両者の今後のありようを思索する時間を与えてくれます。異国の地での生活は、膨大な「うまくいかないこと」と、言葉の壁を超えて「何かが通じ合う瞬間」に満ちています。研究も同様です。私はフェローの期間は英国、米国、日本の国際学会で二ヶ月に一度のペースで学会発表を繰り返しました。日本語者ではない研究者から鋭い質問やコメント、励ましをいただき、「縄文」と「Jomon」研究を確かに越境し、豊かなコミュニケーションが成立する瞬間を味わいました。それらは、今後の研究生活の糧になるでしょう。夏目漱石をはじめとして英国留学では苦勞する人も多いそうですが、英国英語で頻繁に耳にする「ラプリー」な文化、景観、人々に囲まれて過ごす1年間は、縄文/Jomon研究者にとって、かけがえのないものになるはずです。